

2017
おもろ
チャレンジ

北インドのチベット世界、 ラダックにおける祭礼のフィールド調査

文学部 3年

丸本 高己

インド

2018年10月4日-

2018年11月10日



渡航概要と内容

北インド、ヒマラヤにあるチベット系住民の住む地域、ラダックで祭礼についての調査をした。今回の調査の根本的な動機は、普段テキストの中で見ている「宗教」がどのように実践されるのか、その実際の姿を見ること、2科学技術が進んでいる現代において、なぜ「宗教」が依然存続できるのか、そのヒントを得ること。これらに適う調査地としてラダックのデスクットという村を選び、村と僧院の関わり方に焦点をあてて調査した。現地では以下の活動を行った。

1、祭礼の視察

現地でコンタクトをとった僧に連れてもらい、様々な祭礼や供儀の場を見せてもらった。村の中のいち家庭のための小さなものから、全ヌブラ谷（デスクットを含む広範な地域）から参列者の集まる大きなものまで、規模がさまざまであれば、奉る尊格・神格もさまざま、その奉り方もさまざまな、幾種の祭礼・供儀を見、どういったことが起きているのか記録した。毎回、僧らにそれらの内容・意味・意義等についてインタビューし、それに参列している村人たちには、彼ら彼女らが何を思ってそれらに参列しているのかをインタビューした。

2、僧院の視察

祭礼を見てゆくにあたってその背景を知る必要があったため、僧院の歴史や、建造物のつくり、そこに収められている仏像などを調べた。また、僧が普段どのような活動をしているのか見るため、彼らの生活に密着した。

3、僧院小学校の視察

村人と僧院をつなぐ存在として（僧院に入るのは地域出身の子供たち）、僧院で学ぶ子供僧に着

目し、彼らの生活に密着した。

4、帰国後により調査を深めるため、いくつかの経を僧から入手した。



僧らの一日に密着していたときに配給してもらった
伝統料理トゥクパ



祭礼に用いられる供物の制作風景

以上の活動を通じて、やはり言語の違いで最も苦勞した。調査地ではラダック語（チベット語の一方言）が話されており、僧院関連ではチベット語が使われている。私は渡航前からチベット語の学習をしていたが、発音を習得するの一手一杯といった状態であった。現地では若者なら日常会話程度の英語を話せるので、生活のうえで苦勞はしなかったが、僧院のことや、祭礼の意味、経で唱えられていることなど、次元の深い仏教思想の話になると、彼らの多くは英語で説明することが困難であった。そのため幾度か、僧の話をも僧院小学校の英語教師に翻訳してもらった。それでも分からないことはチベット語で僧に書き記してもらい、持ち帰り課題とした（チベット語をある程度習得してから調べ直すため）。

渡航中には大きなトラブルは起こらなかった。しかし、調査地は対パキスタン・中国との国境紛争地帯に近く、有事になれば非常に危険だということを意識し、レー（ラダックの中心市街地）で最新の情報を得てから現地に向かった。

渡航を通じて感じたこと・学んだこと

渡航調査をふりかえって、多くの反省や課題が見つかった。まず、目標や調査手法が曖昧であったのが一番の反省である。動機こそ確たるものであったものの、それをどう調査につなげてゆくべきか、予習が足りなかったために、調査としては不完全であったと言わざるを得ない。

また、実際に現地へ赴き、調査をしてはじめて気づいた課題も多かった。調査地の村の様子が思い描いていたものとは違った、言語の壁が大きかった、などなど。特に大きな課題を感じたのは、僧や村人らにインタビュー調査をした時であった。インタビューをするときには、予め想定している内容が返ってくることを期待してしまい、誘導尋問のような形になってしまうことが多かった。こういったフィールド調査特有の困難・課題も実際に渡航したことで実感した。

しかし、そういった質問に対し想定していなかった答えが返ってき時や、渡航前に読んだ本や論文には書いていなかったことを教えてもらえた時などはとても面白かった。これもまた、現地

に行ったからこそ経験できたことである。

■ 今回の経験をどのように今後生かしていくか

私は文学部宗教学専修に属している。普段は哲学者にとって宗教がどのように考えられているのかについて研究しており、基本的にその対象としているのはテキストの世界である。今回、そこからいったん離れ、「宗教的」儀礼が実践される姿を見、現にそれを信仰する僧や村人が思っていることに耳を傾けた。実践の世界について今回学んだものを、書物の世界と結び付けることが大きな目標である。哲学者の考える宗教だけにとらわれることなく、実際にどう宗教が人々に息づいているのかをきちんと捉えながら、その宗教の思想について研究する、という私の指針の第一歩を踏み出せたという意味で、今回の調査は非常に意義深いものとなった。将来的には、未だ漠然とした展望ではあるが、より高度な次元で哲学と交差させてゆきたい。

そのためには、大乘仏教思想について、僧院と村を含む社会制度について、などなどこれから学ばなければならないことはいくつもある。そんな中で、より具体的な目標を掲げるならば、まずは持ち帰ってきた経を読めるようになるまでチベット語を習得する。そこに書かれていることの概略は僧らに教えてもらったが、自分の力でより詳細にそれらを読みこみ、この経のなかで息づく思想に触れたいと思っている。

■ 主な奨学金の使途

- *宿泊費・食費
- *機材費
- *渡航費
- *現地交通費
- *謝礼・雑費 など

